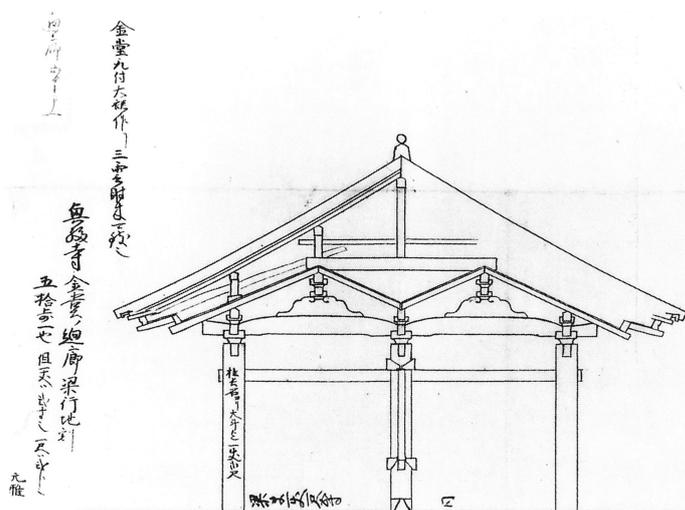


2 中金堂院の歴史と回廊の建築

中金堂院の歴史 広く知られているように、山階寺を起源とする興福寺は、飛鳥の地に移って厩坂寺と号し、さらに和銅3年(710)の平城遷都によって、平城京の外京にあたる左京三条七坊の地に建立された。平城京における興福寺の創建については明確でない。興福寺の名が歴史上はじめて現れるのは、『続日本紀』養老4年(720)10月17日条の「始めて養民、造器および造興福寺仏殿の三司をおく」という記事だが、これを興福寺造営の端緒とは考えず、造営あるいはその計画が進んでいたときに、官寺として造営することが決まったことを示すものと理解する説が有力である。中金堂と中門をむすぶ回廊で囲われた区画を中金堂院とよぶ。創建以来、大災害とは無縁であったこの中金堂院一郭も、永承元年(1046)の火災をはじめとして、平安時代にこのほか3度(康平3年(1060)・永長元年(1096)・治承4年(1180))、鎌倉時代に2度(建治3年(1277)・嘉暦2年(1327))焼失する。藤原氏の氏寺として強大な力を有していた興福寺は、そのたびごとに再建を重ねてきたが、江戸時代の享保2年(1717)におきた7度目の火災の後には、南円堂が寛保元年(1741)に復興されたものの、中金堂仮堂がろうじて文政2年(1819)に建てられただけで、回廊や中門はついに再建されなかった。

回廊の建築 回廊の建立は、中金堂とともにほぼ興福寺の創建当初頃と考えられている。『興福寺流記』は、「一廊等。廊者廡也云云。宝字記云。中門東西各長九丈四尺并広二丈四尺云云。右天平記云。歩廊一条。南門左右各七間。東西各十七間。宝字記云。東西各廿二丈二尺。堂左右各六間。宝字記云。各長八丈云云。」と伝え、また中門の項には「(前略)延暦記云。(中略)四方各小門二門。宝字記云。小門八口云云。」とある。さらに柱数を記した記録や古絵図などから、回廊は複廊で、その柱間を扉とした小門が各面に2つずつ開くと考えられてきた。興福寺伽藍を復原した大岡實は、これらの文献だけでなく、現地での地上観察および遺存する礎石位置の測量成果などを加えて、回廊の柱間寸法を推定した(『南都七大寺の研究』1966)。しかし、東西面回廊における桁行方向の柱間寸法については、遺存礎石から考えられる規模が文献と整合しないことから、「後世柱間が変更された」と解釈しながらも、「将来の検討にまちたい」とむすんでいた。

ところで、東京国立博物館には『興福寺建築諸図』と一括された多数の建築図面が残る。そのなかに回廊の平面図(23ページ、第26図)と梁行断面図(第2図)がある。断面図は梁行2間(梁行寸法：



第2図 『興福寺建築諸図』所収の回廊梁行断面図

一丈一尺五寸)の複廊を瓦葺きに描く。細部形態には古式を残す部分もみられ、享保焼失前の実測図という解釈(濱島正士「『興福寺建築諸図』について」『MUSEUM』461 1989)でよいだろう。つまり、嘉暦2年の焼失後に再興された回廊を描いたものである。享保焼失後は再建されなかったため、発掘調査によって、少なくともこの図と一致する遺構の検出が期待できた。なお、現存する春日大社本社回廊(17世紀初)は、この断面図とほぼ同じ構造をもつ。

